

第21回日本胸部外科学会主催の思い出

第21回 会長 加 納 保 之

第21回日本胸部外科学会は昭和43年10月29日および30日に東京の国立教育会館虎の門ホール、同館大会議室、ニッショーホール、発明会館ホールおよびイイノホールを会場として開催した。このごろはどこもそうであろうが東京では当時既にこれらの会場をとるためにはまる1年前に予約しておかねばならなかった。

学会は一般演題 181題、シンポジウム 5題、教育講演 6題および映画 9本で構成した。2日間ですべての内容を消化するために若干の演題を割愛しなければならなかったが、学会運営上提出された演題をお返ししなければならないということは会長として最もつらいことである。今でも申し訳ないことであつたと思っている。

当時は今日のように学会運営会社が無かったので、これだけの大会がすべて教室員の自発的な協力によって運営された。このことは今日では考えられないことであろうが、当時はそのような連帯感と結合があつたのであり、当時の教室員に今も感謝している。この感謝の気持はこれからも続くであろうし、何かあらば報いるであろう。

この学会に於て和田教授の心臓移植に関する報告を番外演題としてあつた。これは日本外科学会として前例のないことであり、記憶に残るできごとであつた。それは演題提出の締切り期日が昭和43年7月31日であつたが8月8日に心臓移植手術がおこなわれた。

ジャーナリズムはこの手術を大々的にとりあげて、いろいろと問題を提起しテンヤワンヤの騒ぎになり、社会問題として展開しつつあつた。私は、しかし、心臓移植は我が国では初めての経験であり、社会問題化されんとしている状況に鑑み日本胸部外科学会会員として学術的にその真相を知っているべきであり、術者もその全貌を学術上发表すべきであると考えて、その旨を和田教授に伝へた。こうして学会第1日の最後に番外演題として和田教授以下26名の連名で「心臓移植術の臨床」という報告がなされた。

このときはもちろん多数の報道関係者が押し寄せてきたのであり、われわれ学会人がまだかつて経験したことのない無作法さ、身勝手さ、無礼さに出逢い、これらの人々に学会運営の秩序を乱さないようにしてもらつたため教室員の払つた苦勞は大変なものであつた。

むしろこのことが学会運営の思い出の最たるものであると云つてもよいかもしれない。

(防衛医科大学校教授)